

聲明一家に就て 松帆 諱園 六大新報 1906-1907
須彌山の有無について 瀬成 世眼 高野山時報 1922

彙報

學會記事

□大正十二年二月九日(金曜)午後三時より第一教室に於て佛教史學會例會を開く。聽衆は教職員及學生合せて四十名。演題并に講師は左の如し。

祝戀望人見寫の選擇集について 日下 無倫氏
故光瑩法主の洋行事情 佐々木月樵氏

—明治維新史の一節—

□大正十二年三月三日(土曜)午後一時より第一教室に於て史學會例會を開く。聽衆三十名、左の二氏の講演あり。

總相旅行談 橋川 正氏
支那旅行談 神田喜一郎氏

□大正十二年三月九日(金曜)午後一時より講堂に於て本學講演部主催の特別講演あり。講師并に演題左の如し。

尼波羅國佛教の過去及現在

佛國文學博士 シルゲン、レヴイ氏
通 譯 松井知時氏

稻葉教授の近信

支那佛教史蹟巡禮中の本學教授稻葉圓成氏から日下教授に宛

てられた書狀が最近二通届いたから同氏に乞ふて茲に載せることにする。都合上省略した箇所もあるが豫め讀者諸氏に謝つておく。

第一信

其の後は無沙汰のみいたし候。長等兄の病氣が先月中旬より再び肋膜炎を併發して危篤に陥り、御令聞を國許より喚寄せらるさいふ騒ぎを演じ、これがため上海を脱すること又々延引いたし居り荏苒日を空しくいたし候。然るに去十二日南京に居留民追悼會に列するを機會とし、且つ令夫人も來着せられ、白木澤君も十二日に來着の入電もあり、病人の容態もや、良好に向ひ旁々十一日夜上海を出で南京に向ひ候。十二日は南京にて輪番代理として法要相勤め其夜は領事の招待宴に列し申候。然るに、~~精~~南京見物に來合せた九條武子姫と其母君一行と同一の食卓にて、内地にも劣らぬ美味の日本料理の饗應にあづかり、その夜領事館にて一場の講話をいたし候。十三日は市内にある支那内學院を見學いたし候。これは佛教の専門學校にて將來佛教大學を建設する準備中との事に有之候。内容は貧弱にして云ふに足らざれど其の意氣込みはスバラシイものに有之候。午後は古本屋を素見し二三を購入いたし候。十四日は戒律の専門道場たる寶華山へ參り候。これは既に常盤博士の探查せられたる處に有之候が、この寺にては春冬二期傳戒あり、一會に多きは千百有余人少きも二三百人の授戒の比丘比丘尼も有之候との事にて現に陰曆三月一日より春期傳戒があるので、登山の比丘比丘尼引きも切らぬ有様に有之候。山には躑躅の花盛にて脚下から

雄か飛び立つなど、野趣満々たるものあり、何さもないへぬ氣持を味ひ申候。その脚にて歸路樓霞寺に再遊せんさせしも汽車時間に外れるので、これを割愛して南京に歸り申候。

十五日朝岳陽丸に乗船、南京を發し漢口に向ひ申候。連日の雨にて鬱陶敷く候も、幸に同船の客に新任の漢口領事の一家族あり、九歳を頭に三人の小供もあり、愉快に二夜を明し、ツイ先きに赤壁の古蹟は右に見、あれが東坡寺など船長より説明を聞きながら通過いたし候。赤壁は繪の如くにはあらずも一寸まさまつたよい景色の處に候。——(中略)——次に本日午後(四月十七日)漢口に着、それより荊州玉泉寺に往き、一度漢口に引返し更に南嶽に登りて江西に入り著名の禪刹を歴訪して九江に出で、再び上海に歸るつもりに候。この間約一ヶ月半にて上海歸着は五月下旬の豫定に候。先は右近情おしらせまで。教職員諸卿へもよろしく御傳へを乞ふ。

楊子江上岳陽丸船室にて

稻葉圓成より

日下無倫兄

第二信

拜啓。私事十八日漢口着、船の都合で佛教青年會の講演にて意外に手間取り廿四日午前漸く漢口出發大享丸にて宜昌に向ひ申候。明廿七日宜昌着それより天台の芳跡たる玉泉山に詣するつもりに候。歸路沙市に立寄りそれより湖南に入り南嶽登山の豫定に有之候。サテ漢口にては九蓮寺に在る華嚴大學を看、佛教會本部を訪問いたし、武昌の佛學院をも參觀いたし候。華嚴大學

は僅に三十二名の學生を有する私塾に過ぎざるも、支那の佛寺が新式の教育を僧徒に施さんとする新しき試みの一として興味あるものに有之候。佛教會は會員三千名いづれも三歸五戒を持ち居る由にて、こゝでも目下佛教學校の新設を企て居り、その校舎の新築も八九分通り出來上り居候。その常任幹事胡震東はよく英語を話し候が、中日佛教徒の聯盟を力説し引いては英文にて歐米に佛教の宣傳をせねばならぬと申し居り *For the Best interests of Buddhism* の成立を切望するに附け加へ申候。よつて我大學には既に「東方佛教」といふ英字雜誌發刊いたし居る旨話し候處非常に感心いたし是非それを看たいと申し居り候間承諾の旨を語り申候。

次に武昌の佛學院は太虚和尚の經營にかゝり規模大に整ひ、學生は百名足らずの僧侶を集め居り緊張して勉學をいそしみ居り候。殊に哲學英文日文までも課目の中に有之候。日文の教員慧閑居士には面悟いたし候が、境野齊藤等諸氏の日本佛教書を机上に並べ舟橋兄の原始佛教史も供へ居候。話は充分にあらざるも、境野氏の印度佛教史を支那語に翻譯して教科書に使ひ居り申候。太虚和尚にも面悟し候が同和尚は支那佛教界屈指の高僧にて殊に新思想を代表せる點に於て第一人者と申すことに有之候。そして同和尚よりは熱心に大谷大學發行の佛教研究を寄贈されたいと申し居られ候。そして同佛學院發刊の海潮音といふ月刊と交換してくれと熱心に申し居られ候。云々

四月廿六日

大享丸船室にて 稻葉圓成寄

日下無倫兄